修技所における教科書『兵要地学教程』に関する一研究：書誌学的調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 和歌山大学教育学部地理学教室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 源, 昌久 メールアドレス: 所属: 淑徳大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-020

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	修技所における教科書『兵要地学教程』に関する一研究：書誌学的調査
Author	源, 昌久
Citation	空間・社会・地理思想. 16 巻, p.67-74.
Issue Date	2013
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	和歌山大学教育学部地理学教室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-020

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

（研究ノート）

空間・社会・地理思想 16 号，67-74 頁，2013 年
Space, Society and Geographical Thought

修技所における教科書『兵要地学教程』に関する一研究
――書誌学的調査――

源　昌久 *

Shokyu　MINAMOTO

A Study of *Heiyochigaku Kyotei* (A Textbook for Military Geography) at the Surveyors Training School in Meiji Japan：A Bibliographical Survey

Ⅰ　はじめに

筆者は、ここ十余年、日本における軍事と地理学との関連についての研究の基礎的作業を進めてきている。先に発表した「陸軍士官学校における「兵要地学」に関する一研究　――明治期を中心に――」（源2012）において、明治期の陸軍士官学校の教授科目「兵要地学（地理）」で使用された「教程」（教科書）として、『兵要地学教程講本』、『兵要地学教程』の二冊を取り上げ、比較・検討した。その過程で陸軍省のお雇い外国人（フランス、武官）の果たした役割およびフランス地理学の影響を認識した。

今回、参謀本部陸軍部測量局修技所（参謀本部陸地測量部修技所と改称、以下「修技所」と略す）（1887（明治20）年創設、1888年1月入所生受け入れ）の創成期に同所で使用された一群の教科書を防衛研究所図書館で閲覧することができた。その内の一冊に兵要地学の語がタイトルに含まれている書物が見出された。本稿の目的は、前記の書と（源2012）中で分析した『兵要地学教程講本』、『兵要地学教程』二冊との関連を書誌学的に検討することである。筆者は、向後のテーマの基礎的作業の一環として今次の研究を位置付けている。

本稿の表記上の注意についてのべておく。使用する漢字は、なるべく現行の日本語で一般的な字体を用い、異体字等は書き換えた。（　）記号は、表示されている事項を付加する場合に使用する。［　］記号は、表示されていない事項を付加する場合に使用する。

Ⅱ　修技所の創設と旧所蔵者　秦　釱（ハチ）太郎

1．修技所の創設

明治政府は、明治初期から全国測量事業実施上、測量技術者の養成に取り組み、政府の省・機関（内務省、陸軍省、工部省等）により個別に欧米先進諸国から技術者を招き、養成教育を行ってきた（土橋1984：1-2、測量・地図百年史編集委員会:514）。しかし、このような応急的な措置では十分な成果を上げることはできなくなった。この間の経緯を陸地測量部（1922：77）は、「測量製図ノ事業タル一種ノ専門学ニ属シ…　特ニ業務大拡張ノ必要ハ目睫ノ間ニ迫ルアリ此ニ於テ新タニ之カ教育機関ヲ起シ一般人民ヨリ其ノ志願者ヲ募集シ以テ技術者遺憾ナカラシメンコトヲ期シ…」と述べている。1887（明治20）年6月1日、測量技術者を組織的に養成する案を具申し、9月12日に許可を得て、一般人からの募集を行うようになった（佐藤1993：42）。同9月13日、陸軍省告示第5号（内閣官報局1977：377-383）中の「参謀本部陸軍部測量局修技生検査格例」には応募年齢は「満十五年以上二十三年以下」（後に変更[1]）、修業期間は「概子三カ年トス」（実際と異なる。後述）と掲載されている。「参謀本部陸軍部測量局修技生期間修業科目」には科目を三角測量、地形測量に大別し、学ぶべき予定の科目名が列挙されている（III の 1．参照）。その後に、願書、履歴書の書式が付されている。

募集は、参謀本部陸軍部測量局（1888:0013）の「（明治廿年中）局務年報」によると次のように記されている。

明治二十［1887］年六月陸軍省告示第五号ニ依リ

＊　淑徳大学総合福祉学部

十一月修技生ヲ召募ス志願者百四十五名内検査ニ合格スル者三十八名ナリ然レドモ未タ修技所ノ設ケナキヲ以テ来ル一月ニ至リ採用スヘキ見込ミナリ

参謀本部(1889:1246)の「明治二十二年中　生徒人員増減表」によると修技生(第1期生徒)の合格者数は、35名(内、1名が途中で事故により減)で卒業生は34名となっている[2]。入学生数は35名であったと筆者は推察している。翌年、1月に入所し、ここに、日本で初めての測量専門養成機関が創設され、教育が開始された。1888年5月12日　勅令25号「参謀本部條例」第5条(内閣官報局1978a：73)に、「...陸地測量部ハ陸軍参謀本部ノ管轄ニ属ス」および同勅令「陸地測量部條例」第2条(内閣官報局1978a：74)に、「陸地測量部ニ三角科地形科及製図科ヲ置キ数班ニ分チ又別ニ修技所ヲ置ク」(筆者下線)と記され、一局であった測量局から参謀本部直轄の独立した官衙　測量部となり、修技所も測量部の下に設けられた[3]。

修業(教育)期間は、「参謀本部陸軍部測量局修技生検査格例」では3カ年と記されていたが、第1期生徒は約2年間であった。1890年5月9日、陸軍省令第13号　陸地測量部修技所生徒採用規則(内閣官報局1978b:90)第10条で、「生徒ノ修学年限ハ大概ネ一箇年トシ」と規定され、以後、約1ヵ年と短縮される。第1期生徒においては、普通学を卒業(修了)した後、「次[1889]年ヨリ三角、地形、製図ノ三科ニ区分」(参謀本部　1888:1706)され、各科で専修する(「生徒課程」)。1889年7月には、参謀本部(1890a：1157)によると、「測量官任用規則[4]ニ依リ高等学生教授概則ヲ定メラル即チ測量手ヨリ九名ノ学生ヲ選抜シテ其学科ヲ授ク」と記され、アドヴァンス・コースとして実務経験を積んだ測量手を対象に「学生課程」(修業期間　約2ヵ年間)が設けられた。

2．秦　釰太郎

ここで、前述の修技所の第1期生徒で、防衛研究所図書館へ寄贈された教科書類の旧所蔵者　秦　釰太郎(1869(明治２)年10月9日―1941(昭和16)年1月2日)を紹介してみよう。防衛省防衛研究所　戦史研究センター　史料室　菅野直樹主任研究官作成(2006)の『秦　釰太郎関連史料目録』に収載されている秦自筆の履歴書・学術履歴書(作成年不明)の複製を主として利用する。

学術履歴関係を見てみよう。

1883(明治16)年、公立麻布小学校を卒業する。これから1887年8月まで「漢学」を尚友学校[5](芝区城山町八番地)で学ぶ。「数学」を1884年2月から1886年3月まで尚友学校で学ぶ。その後、神代精三[専門は数学か][6]に従学する。「英学」を1884年2月、勧学義塾[7](芝区愛宕下町)において学び、1885年3月、聖教社へ転校し、「ショウ」氏に従学する。この間に地理学の学習を見ると、「一英学...「ミッチル」小地理書、...」と記載されている。いずれの学校・塾で学んだかは不明である。

1888年1月、参謀本部陸軍部測量局修技所に入学する。日本測量協会(1952:21)によると、秦は普通学を修了し、製図科に進む。秦自身は、「図学及ビ之レニ属スル諸学科ヲ修技所ニ於テ学ブ」と記している。

1889年12月27日、修技所を卒業し、証書を得る。

職歴を履歴書から見てみよう。

1889年12月27日、陸地測量部陸地測量手に判任官十等級として採用される。

1901年8月26日、三井鉱山合名会社に入り、測量、製図に従事する。職歴の最後は1922(大正11)年10月20日、渋谷区町役場の土木課勤務である。

秦の旧蔵書　23冊が2006年に河野マリ子氏(秦　釰太郎は祖父に当たる)から防衛研究所図書館へ寄贈された。寄贈書中には、刊年等から明らかに修技所時代の図書ではないと判断されるものもある。装丁[8]は、おもに和装であるが、防衛研究所図書館での再製本等により洋装およびどちらかを判断しかねる図書も存在した。以下、書名(タイトル)を防衛研究所図書館のカタログの排列順に列挙してみる。

１)『球面三角学　全』(タイトルは外題による)２)『測量術総論』(巻頭)３)『測量術第四篇』(巻頭)４)『測量術第八篇』(巻頭)５)『測量術第十一篇』(巻頭)６)『図画学　第一篇』(外題)７)『図画学　第二篇』(外題)８)『図画学　四篇(ママ)』(外題)９)『図画学　第五篇』(外題)10)『土地学』1890年刊(陸地測量部)(標題紙)洋装本？ 11)『土地学附図』1890年刊(陸地測量部)洋装本 12)『化学摘要』(巻頭)13)『地形測量説約　全』(外題)14)『地形測量説約附図　全』(外題)15)『行軍測絵図』(外題)洋装本 16)『地形原図図式』1894年刊　洋装本 17)『地形測量教本　二万分一地形原図描書ノ部』(外題)18)『代数幾何学　二軸ノ部　全』(外題)19)『兵要地学教程』(巻頭)20)『製図学教本』(巻頭)21)『製図学教本附図』(版心)22)『地文学』(巻頭)23)『製図軌範』(目首)

本稿ではこのコレクションの内、19)をⅢの２.で検討する。

教科書の編集について、「其教科書ハ総テ本所ニ於テ受持教員ノ編輯スルモノニ係ル」(参謀本部

1888:1707)と記されている。

教科書の所有（使用）について、1890年５月９日陸軍省令第13号　陸地測量部修技所生徒採用規則（内閣官報局1978b:90）の第10条で、「... 修学ニ要スル書籍及ビ消耗品ヲ貸給シ其他ハ総テ自弁トス」（筆者下線）と記されている。しかし、同年6月11日、参謀総長から陸軍大臣へ「教科書渡切ノ件」の照会（参謀本部1890b:0530-0531）がなされた。

> 其授業ニハ成ルヘク時間ヲ節省シ得ルノ方法ヲ用ヒサル可ラス就テハ学生々徒ノ筆記ヲ補助スル為メ講本ヲ作テ之ヲ与ヘ無用ノ時間ヲ節省シ来リ候... 講本ハ教官ノ説明ニ従ヒ各自適宜ニ注釈疏解ヲ掲ケ引証適例ヲ載セ或ハ図例算式等ヲ対照附記シテ時習ニ便ナラシメ...（筆者下線）

19日、照会の趣旨が承認されたとの回答を得る。この文書は1890年6月の照会・回答であるが、1888-1889年においても、生徒が使用する教科書は無償で与えられていたのではなかろうか。

III　修技所における教科目および教科書『兵要地学教程』

1. 修技所における教科目

教科目を調査するツールとして、先述した入学（生徒課程）するための案内である「参謀本部陸軍部測量局修技生期間修業科目」（内閣官報局1977：379-381）を始めに記してみよう。三角測量に算学、物理学、化学、地文学、図画学、地形測量、製図、三角測量、地形測量には算学（球三角学（他））、物理学、化学、地文学、金石地質及び土性学、図画学、製図、地形測量、製図、算学（代数学（他））、物理学、化学、地文学，図画学、三角測量、製図とし化学、図画学および製図は課内専門技術の区別に従ってその要部を学習せよとしている。重複して記されている科目は、各々の内容・レベルが異なる。これらはあくまでも学習する予定である。

実施された例として、1889（明治22）の「陸地測量部修技所生徒学術進歩ノ景況」（参謀本部1890a:1263-1264）を見ると次のとおりである。

普通科：数学（球面三角学（他））、地文学、物理学、化学（無機ノ部）、図画学、地形学（地形測量説約）、三角学（三角測量説約）、製図学（製図説約）。　**専門科**：三角科　代数幾何学、微分学、積分学、最小方数法、三角測量学、実地作業。　地形科　地形学、地学、最小方数法、実地作業。製図科　製図学、土地学、化学（有機ノ部）、実地作業。

「明治二十三年中測量部修技生徒学術大試験点数表」（参謀本部1890a:1251）によると「科目」は、次のとおりである。

学科：数学、地文学、物理学、化学、三角説約、地形説約、製図説約、代数幾何学、三角学、微分学、積分学、最小方数法、地学、製図学、土地学。**術科**:、実地写景、三角測量、地形測量、製図術。

これら三種の科目表中には、「兵要地学」は記載されていない。しかし、秦旧蔵書の19）『兵要地学教程』（筆者下線）は修技所のテクスト・ブックとして存在している。「地文学」、「地形学」等の一部で講ぜられたのかもしれない。筆者は、以前から「兵要地学」・「兵要地誌」が必ずしも同名の講義の中だけではなく、「歴史輿地学」等の中でも講義されていたとことを指摘している（源2011:12、源2012：75）。今回も同様に考えたい。

2.『兵要地学教程』について

先に述べたように『兵要地学教程』（旧秦蔵本）は当時の修技所の教科書であろう。ここで本書と内容・形態が共に類似しているテクスト・ブックとして、筆者は『兵要地学教程』（陸軍士官学校版　1887年改訂）を見出した。源（2012：78-79）で『兵要地学教程講本』（18―）および『兵要地学教程』（陸軍士官学校版　1887年改訂）については既に比較、検討している。ここでは三書のうち、特に『兵要地学教程』（陸軍士官学校版と旧秦蔵本）について書誌学的な検討をこころみる。陸軍士官学校版の緒言（[陸軍士官学校]1887：緒言）を引用・再録してみる。

> ①明治九［1876］教師佛国陸軍中尉*Bille*t氏ヲシテ兵要地学教程ヲ編輯シ地学科ニ命シテ之ヲ翻訳セシム此書ヤ専ラ兵家枢要ノ部ヲ詳説シ其末ニ千七百九十六年ノ*Italie*戦記ヲ畧説シ以テ兵学講究ノ助トス之ヲ此書ノ濫觴トス②翌十年復タ教師佛国陸軍中尉*Fauconne*t氏ヲシテ*Allemagne*地方ノ一局部ニ就キ地理及戦記ヲ編纂セシメ之ヲ訳シ題シテ兵要地学附録トス③明治十二［1879］年歴史輿地学教官辻本一貫三木信近ニ命シ以上ノ二書ヲ取捨シ合シテ一トシ更ニ佛国*Saint-Cyr*学校ノ教科書*Lavallée*氏ノ地誌並*Via*l氏ノ戦記ニ依テ増補シ各地方毎ニ其地ニ起リシ有名戦争ヲ附記セシム④其後明治十五［1882］年歴史輿地学教官三木信近ヲシテ前教程ノ戦記ヲ省キ特ニ有名戦争ノアリシ地理ノ

ミヲ記セシメリ⑤本年改版板ノ期ニ際シ陸軍教授三木信近ヲシテ更ニ地名人名ヲ佛字ニ改メシメ以テ上梓スト云爾

明治二十年五月　陸軍士官学校(筆者〇数字)

上記の『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)の緒言を整理し、各テクスト・ブックの成立経緯を検討してみよう。①は源(2012：76-77)で紹介した『兵要地学教程講本』に相当する。②は、1877年に補訂され、タイトルに『兵要地学附録』が記載された書が刊行される(筆者未見)。③は、1879年、陸軍士官学校教官　辻本一貫　三木信近により『兵要地学教程講本』および『兵要地学附録』の内容を取捨し一冊として、さらにLavallée氏の地誌とVial氏の戦記で増補して刊行される(筆者未見)。④は、1882年、三木信近により③の内、戦記を省いて、有名戦場の地理のみを記載している(⑤と比較すると、地名・人名がフランス語でない)。⑤1887年、④を底本として地名・人名をフランス語(原語)に改める。本書が『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)である。

『兵要地学教程』(旧秦蔵本)が使用されたのは、1888年以降である。しかし、内容・構成が④に相当する。『兵要地学教程』(旧秦蔵本)は、④を1887-1888年頃に覆製したのであろう(覆製本)。

本書の書誌的事項を記す。

責任表示:[責任表示不明]出版地:[出版地不明不明]出版者:[出版者不明]　出版年:[1887-1888年？]形態:191丁 図版[4]枚　17ｃｍ[半紙判本]

装丁:和装[四つ目綴]

版式(版面の形式)は四周単辺10行24字である。貼り外題は『兵要地学　完』である(筆者は巻頭書名を採用)。両書とも形態的にはほぼ同様である。

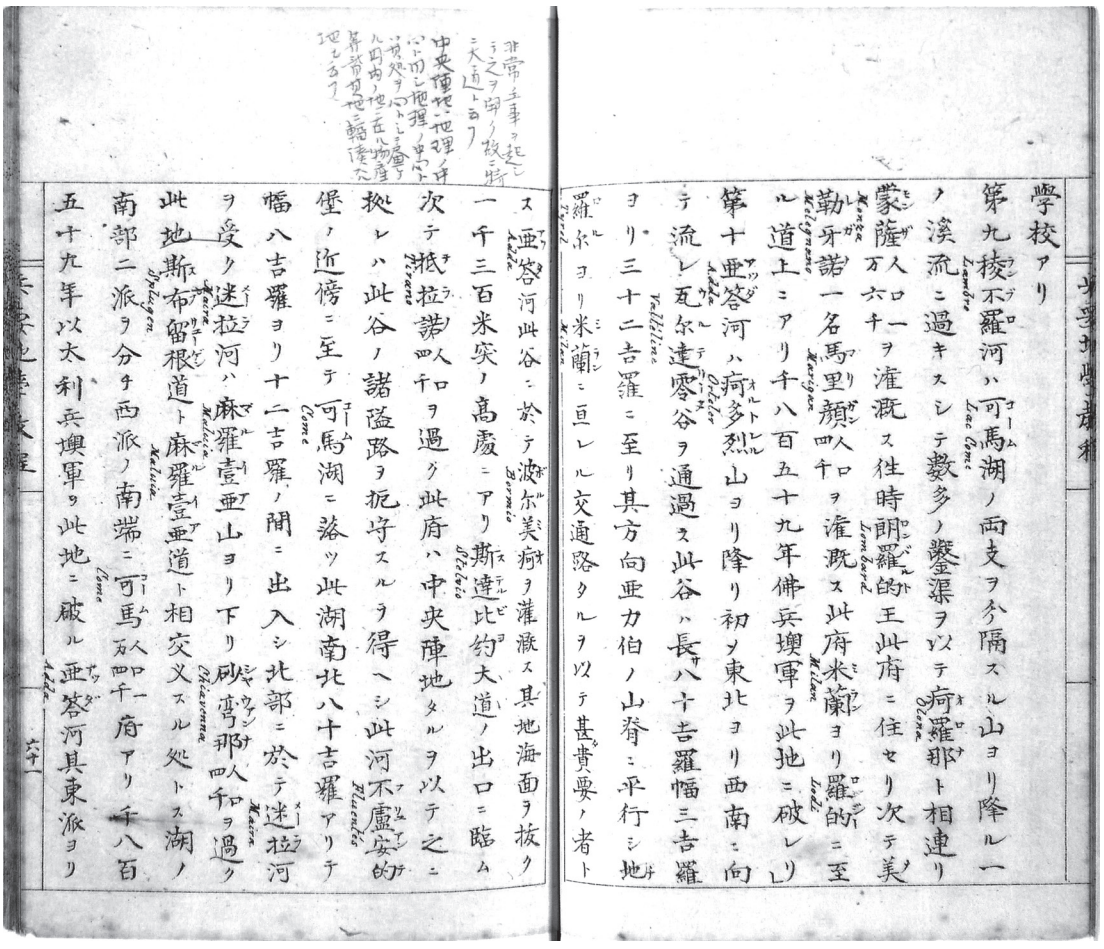

図1 『兵要地学教程』(旧秦蔵書本)の第60丁(ウ)と第61丁(オ)

* 第61丁(オ)本文中の「大道」の右側に傍点あり。第4章波江［ポー川］及其枝流の一部

本書には、菅野により、「陸地測量部勤務に先立ち、明治二十一[1888]年から翌年にかけ、同部修技科(ママ)に学んでいる。本史料を秦氏は同科履修中に利用し、史料中の朱字は秦により記されたと考えられる」と書かれた紙片が挿まれている。本書への書き込みは、本文中あるいは匡郭(わく)の上部に朱あるいは墨字でなされている（図１参照)。『兵要地学教程』（旧秦蔵本）の内容(構成)を本文の見出しを抽出して作成する[9]。

内容(構成)

第１編：第１丁(オ)―　第２０丁(オ)

第１回地球儀、　第２回地図ノ模景法、…第11回美尓加多尓(メルカトル)ノ法(一名航海図)、第12回地図ノ画法

第２篇：　第２０丁(オ)―第３３丁(オ)

第１回地表、第２回地論、第３回山論

第３篇　亜得亜的海ノ水経：第３３丁(オ)―第６９丁(ウ)(章見出し省略)（以下、同様）

第４編　黒海ノ水経：第６９丁(ウ)―第１０４丁(オ)

第５篇　波羅的海ノ水経：第１０４丁(オ)―第１１４丁(オ)

第６篇　北海ノ水経：第１１４丁(オ)―第１７５丁(オ)

第７編　満砂海ノ水経：第１７５丁(オ)―第１９１丁(ウ)

兵要地学教程附図(１８図)

『兵要地学教程』(旧秦蔵本)と『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)との形態、内容(構成)共に概ね一致している。相違点は、内容(構成)面で前書には、緒言、目次が付されてない。本文(テクスト)において、地名・人名がフランス語から音訳されて記載され、右側にカタカナのルビ、左側に原綴が付記されている(図１参照)。後書には原綴で示されている。仏語の地名・人名の音訳から原綴への変化は、精密性を重んじた結果から生じたのであろうか。この点についての検討は、後日、他の類書とも比較し検討してみたい。なお、『兵要地学教程講本』では、主として音訳のみであるが、右側にカタカナのルビが付されている場合もある。左側に人名の場合には二重の傍線、地名の場合には一重の傍線を施してある。

Ⅳ　両書の比較―書き込み等を通じて

教程(教科書)が実際に所有者により使用された跡をトレースすることは、教育実践記録を知る上で重要である。このような視点から、秦が『兵要地学教

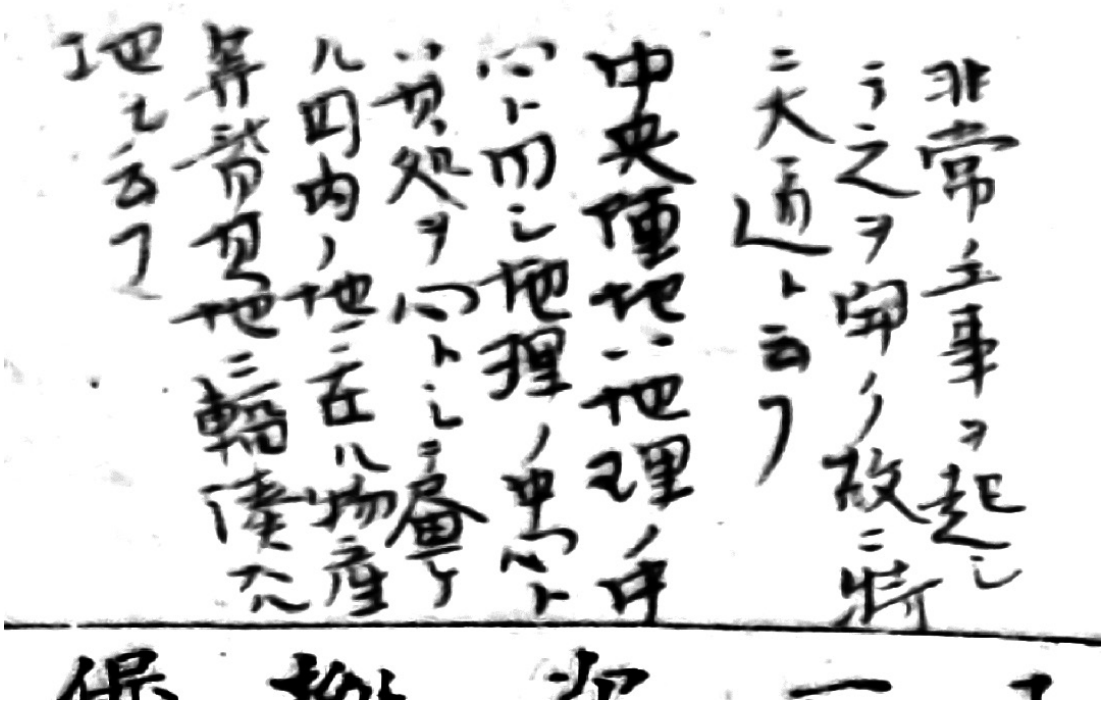

図２　第61丁(オ)の書き込み（拡大）

*「非常ノ工事ヲ起シテ之ヲ開ク故特ニ大道ト云フ　中央陣地：地理ノ…」(筆者下線)

程』(旧秦蔵本)中に書き込みした箇所を調査してみよう。管見の範囲では、22ヵ所(1丁に2ヵ所の場合はカウントは2とする)であった。次のような結果を得た。

- 第1編　地面ヲ表出スル法(第1丁(オ))から第12回地図ノ画法の終わり(第20丁(オ))までの摸景法(地図投影法)に書き込みが10ヵ所ある。なお、フランス武官が底本・原本に関与しているためか、摸景法のひとつとして「仏国陸軍文庫ノ式」が記載されている(『兵要地学教程講本』、『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)も同様)。
- 全体に、本文中の用語の説明・補足(例えば、第5丁(オ)の本文の「二円形」の右側に傍点を打ち、匡郭の上部に説明を付している。第61丁(オ)の「大通」「中央陣地」の用語を同様に解説している(図1、図2参照))が多く見られた。これは、IIの2．において教科書の所有(使用)について、引用した文章(参謀本部1890b:053 1)中の「講本ハ教官ノ説明ニ従ヒ各自適宜ニ注釈疏解ヲ掲ケ引証適例ヲ載セ或ハ図例算式等ヲ対照附記シテ」を傍証する事柄である。

『兵要地学教程』(旧秦蔵本)とその原本(1882年刊?)の本文(テクスト)が同一と仮定し、『兵要地学教程』(旧秦蔵本)での誤りの訂正箇所が改訂版である『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)で訂正対処されているか否かを調べるために次の調査を行った。つまり、『兵要地学教程』(旧秦蔵本)中の書き込みで訂正されている語句が『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)でどのように整版上で対応されているのかを調査した(表1参照)。筆者の管見の範囲では、訂正が実施された箇所は3ヵ所(4)、6)、8))である。正誤訂正が約3割であった。陸軍士官学校では授業中に誤りの指示を行ったのであろうか。今後の検討課題である。

本稿の終わりに当たり、簡略に本稿の作成過程で見出されたことを述べておこう。

IIの2．でのべたように、修技所の編集方針では、「其教科書ハ総テ本所ニ於テ受持教員ノ編輯スルモノニ係ル」(参謀本部1888:1707)と記されていた。『兵要地学教程』(旧秦蔵本)は、その方針とは異なり、陸軍士官学校で編集された教程を底本とした書物の覆刻本(出版者不明。緒言等の探索のツールが見当

表1　両書の書誌的事項の比較および誤記の訂正度合

書物 / 事項	『兵要地学教程』(旧秦蔵本)	『兵要地学教程』(陸軍士官学校版)
出版年	[1888-1889年?]覆刻 (原本[1882(明治15)年?]刊刻)	1887(明治20)年　改訂
構成	緒言：なし 目次：なし 本文：191丁 図版[4]枚(18図)	緒言：[1]丁 目次：5丁 本文：191丁 図版[4]枚(18図)
記述	人名・地名：仏語の音訳。右脇に原綴、左脇にカタカナを付す。	人名・地名：原綴(仏語)。
誤記の訂正箇所について	1)第19丁(ウ)：國→図へ手書きで訂正。 2)第26丁(オ)：八→五へ手書きで訂正。 3)第42丁(ウ)：亜的日[アジーシ]河を手書きで挿入。 4)第50丁(ウ)：ボルゴホルト→波尔斯拉(ポルスラ)へ手書きで訂正。 5)第53丁(オ)：五→九へ手書きで訂正。 6)第65丁(ウ)：坡浚→坡峻へ手書きで訂正。 7)第162丁(ウ)：洲→縣へ手書きで訂正。 8)第178丁(オ)：諸道ノ集点ニへ手書きで訂正。 9)第180丁(オ)：「陸軍」と百藝学の前に手書きで挿入。	1)第19丁(ウ)：国(筆者注：意味上、「図」が正しい)と刻されている。 2)第26丁(オ)：五と刻されている。 3)第42丁(ウ)：挿入されていない。 4)第50丁(ウ)：*Polesello*と記されている。 5)第53丁(オ)：五のまま。 6)第65丁(ウ)：坡峻と刻されている。 7)第162丁(ウ)：洲のまま。 8)第178丁(オ)：諸道ノ集点ニと刻されている。 9)第180丁(オ)：挿入されず、百藝学のまま。

(筆者作成)

たらない）であった。修技所の創成期では、他の教育機関で既に使用されていた教科書を借用するケースも存在したことが判明した。

細谷（2006：44）は、1882年頃の陸軍での測量事業について次のように記述している。

> 地図測量の分野では、折から明治15［1882］年にドイツで測量学を明治８［1875］年から長年にわたり本格的に学んだ田崎虎之助大尉が帰国、ドイツでのやり方を主張したので、陸軍の地図測量の分野でもドイツの影響が強くなった。

土橋（1984：2）もこの点について次のように述べている。

> 陸軍におけるこれまでの測量方式は、すべて仏国の方式に準拠していたが、明治15［1882］年これを普仏戦勝利国である独国の測量方式に改めることになった。

上述のように、1882年頃を境に日本の地図測量事業は、フランス方式からドイツ（プロシャ）方式へ転換していった。修技所では1888-1889年においても、フランス武官により作成され、フランス地理学の影響の強いテクスト（本文）を原本とした教程を「兵要地学」で使用していたことが判明した。

本稿を作成するにあたり、貴重な資料を複写して下さった小林　茂大阪大学名誉教授、秦　釿太郎に関する情報をご教示していただいた防衛省防衛研究所　戦史研究センター　史料室主任研究官　菅野直樹氏および河野マリ子氏の方々に厚く御礼申し上げる。　なお、本稿は、2012年度科学研究費総合研究（基盤研究（B）（一般））「言語と物質性からみた地理的モダニティの構築に関する地理学史的研究」（研究者代表　島津俊之　課題番号60216075）を使用した。

注

1) 前記の応募条件であると、丁年（男子の満20歳）未満の者が多く入学し、徴兵適齢と差し障りが生ずるので、1890年5月9日、陸軍省令第13号　陸地測量部修技所生徒採用規則（内閣官報局1978b:88）　第1条で「各科下士ノ現役満期後測量官タルヲ志望スル者ニシテ年齢二十八年以下...」と年齢制限が緩められた。

2) 陸地測量部（1922：77）でも、「合格者中島可友外三十四名」と記されている。

3) 陸地測量部（1922：77-78）は、「[1888年］二月参謀本部條例第二十三條中ニ...　第二十六條中...　修技生ハ修技生徒ト改称シ之ヲ第一期修技所生徒トナス」と記されている。筆者はこれらの条文および改訂文言を未見。

4) 1889年3月14日勅令第35号「測量官任用規則」（内閣官報局1978a:82）の第１条によると、「陸地測量師ハ陸地測量手中其任ニ適スル者ヲ選ミ陸地測量部修技所ニ於テ二箇年以上高等ノ学科ヲ修業セシメ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス」と記されている。

5) 尚友学校は、神辺（2003:323）が「明治十六［1883］年・東京府内漢学塾」リスト中に掲載している「（塾主）：若松甘吉　（所在地）西ノ久保城山町　（開塾年）同（明治）五［1872］年」であろう。塾主　若松甘吉は、幕末開業の漢学塾主にも記載され、「沼田藩士でありながら麻布狸穴で漢学塾を開き（文久二［1862］年）かつ葺手町江戸見坂の沼田藩上屋敷でも教授していた者」（神辺2003:332）と記されている。東京港区教育委員会（1987:49）の「港区内の私塾の状況」リスト中の「尚友軒」（所在地: 葺手町　開業:文久二［1862］年　塾主: 若松甘吉）であろう。なお、東京都公文書館情報検索システム（http://www.archives.metro.tokyo.jp/）（最終閲覧：2013-1-15）によって、本校関連の史資料がヒットする。

6) 1890（明治23）年9月23日の讀賣新聞（朝刊）の独立学館の広告文による。

7) 東京都港区教育委員（1987；113）によると、勧学義塾は「名のある愛宕下勧学義塾」と記され、1874年設立の私立外国語学校（英語）であり（東京都港区教育委員会1987；115）、愛宕下町二丁目乙一番地社中持地に所在していた（東京都港区教育委員会1987：50）。なお、東京都公文書館情報検索システム（http://www.archives.metro.tokyo.jp/）（最終閲覧：2013-1-15）によって、本塾関連の史資料がヒットする。

8) 和装本から洋装本への移行について、大沼（2003:138-139）は、「帝国図書館」の蔵書との限定付ながら分析を行い、明治10（1877）年代から洋装本が登場し、明治18(1885)年から明治20(1887)年頃に変移したと述べている。筆者もこの傾向を研究史資料上、経験している。秦の旧蔵書コレクションもこの流れを反映しているのではないか。

9) 源（2012:78）の中で、『兵要地学教程』（陸軍士官学校版）の目次のノンブルを誤記した。次のように訂正。第２編…第２０丁(オ)―第２９丁（オ）（正しくは第３３丁（オ））。第３編...　第２９丁（オ）（正しくは第３３丁（オ））―第６９丁(ウ)。

文献

大沼宜規2003．明治期における和装・洋装本の比較調査．日本出版学会・出版教育研究所編『日本出版史８』126-153．日本エディタースクール出版部．
菅野直樹2006．『秦　釟太郎関連史料目録』（防衛研究所図書館所蔵）．
神辺靖光2003．明治10年代の東京府の漢学塾―「明治十六年東京府管内私立諸学校表」を中心に．生馬寛信編『幕末維新期漢学塾の研究』319-346．渓水社．
佐藤　侃1993．陸軍参謀本部地図課・測量課の事蹟―参謀局の設置から陸地測量部の発足まで．地図31(2):28-46．
参謀本部1888．明治二十一年中陸軍参謀本部年報．アジア歴史センター（以下、「アジ歴」と略す）データベース（以下、「DB」と略す）レファレンスコード（以下、「RC」と略す）：C09060098300(最終閲覧:2013-1-15)．
参謀本部1889．明治二十二年中生徒人員増減表．アジ歴DB RC:C09060110000(最終閲覧:2013-1-15)．
参謀本部1890a．明治二十二年中参謀本部年報．アジ歴DB RC:C09060109800(最終閲覧:2013-1-15)．
参謀本部1890b．修技所教科書渡切ノ件．アジ歴DB RC:C06081261600(最終閲覧:2013-1-15)．
参謀本部陸軍部測量局1888．明治廿年中局務年報．アジ歴DB　RC:C09060079300（最終閲覧:2013-1-15)．
測地・地図百年史編集委員会1970．『測地・地図百年史』日本測量協会．
土橋忠則1984．わが国の測量教育の歩みと現況．全国測量専門学校協議会編『全国測量専門学校協議会資料集'84』1-9．全国測量専門学校協議会．
東京都港区教育委員会1987．『港区教育史―百二十年の教育のあゆみ』上 東京都港区教育委員会．
内閣官報局1977．『明治年間法令全書』第20巻3原書房．
内閣官報局1978a．『明治年間法令全書』第21巻1原書房．
内閣官報局1978b．『明治年間法令全書』第23巻3原書房．
日本測量協会1952．『陸地測量部修技所・同教育部・地理調査所技術員養成所卒業名簿　昭和27年版』日本測量協会．
細谷将右2006．明治初期フランス人地図測量教育者ジュルダンとヴィエイヤールについて．創価大学教育学部論集57:35-45．
源　昌久2011．陸軍大学校における科目「兵要地理」（陸）に関する一研究．空間・社会・地理思想14:3-16．
源　昌久2012．陸軍士官学校における科目「兵要地理」に関する一研究―明治期を中心に．淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部）46:67-85．
陸地測量部1922．『陸地測量沿革誌』陸地測量部．
[陸軍士官学校]1887．『兵要地学教程』[陸軍士官学校]．